

ピアノ弾き歌い実技指導における練習映像提出併用の効果

深見友紀子

(児童学科教授)

中平勝子

(長岡技術科学大学eラーニング研究実践センター助教)

研究協力者 赤羽美希

(東京藝術大学大学院修了)

2006・2007年の2カ年にわたって、対面式授業（レッスン）の時間数の不足を補うため、100名余の学生に自身のピアノ弾き歌い演奏の練習成果を録画・提出させた。その結果、演奏映像を提出するという行為は、ピアノ実技能力の向上に一定の効果があり、自己研鑽へのモチベーションを持たせることにも有効であるという結論に達した。

キーワード：ピアノレッスン，ブレンデッド・ラーニング，eラーニング，非対面式指導，技能開発

1. はじめに

一般的に、保育者養成機関におけるピアノ実技指導は、少ない教員で多くの学生に行わなければならないが、1人あたりのレッスン時間は一週間に5分、多くて10分ほどしかないという状況にある。そのため、入学前にピアノ学習経験が少ない学生が保育者として必要な実技能力を授業内で習得するのは困難となっている。

対面式授業（レッスン）の時間数が限られている状況は保育者（教員）養成機関に共通するものであるため、これまでも幾つかの授業改善が行われてきた。たとえば、中島は、学生同士が互いにピアノ演奏の問題点を指摘することにより、ピアノ実技能力を高める実践を行い（中島，2002）、また、今泉は、「練習カルテ」を導入したピアノ初心者学生に対する個人レッスンを行い（今泉，2004）、ともに一定の効果を得ている。本学児童学科においても、自身のピアノ実技経験に関するメモを作成させたりしているが、こうした対面式授業での他者観察や文字による指導、学生の実技能力への配慮だけでは、自分の演奏を客観的に確認することができないため、学生本人に各自の演奏の長所・短所を振り返らせることは難しく、また、自ら鍛錬しようというモチベーションも持たせにくい。

そこで、我々は、リアルタイム（同期）の教室での授業とeラーニングを組み合わせることで教育の“質保証”を目指す、ブレンデッド・ラーニング（Blended Learning）に着目し、2006年度から児童学科固有科目「児童音楽Ⅰ」において、教室での対面式指導と並行して、履修学生に自身のピアノ弾き歌い練習成果を録画し、提出させるという非対面式指導を始めた。

本稿では、2カ年にわたる実践の結果を分析することによって、ピアノ弾き歌い練習映像を提出することの効果について検証する。

2. 実践環境

(1) 実践科目の概要

「児童音楽Ⅰ」は、2年次前期に開講されている保育士・幼稚園教諭免許取得必須科目（一週あたり180分）であり、児童学科における唯一のピアノ実技関連科目である。担当教員は専任の深見（筆者）と音楽指導非常勤講師1名、ピアノ指導非常勤講師4名の計6名である。授業の前半は音楽（発声指導と合唱）、ピアノ実技（弾き歌いを主としたグループレッスン）を、後半は音楽、ピアノ実技、コードネームの理解（座学）を行っている。

授業期間の前半と後半の間には中間実技試験

を、学期末には期末実技試験とコードネームに関する筆記試験を課しており、中間実技試験では授業の開始時点から中間実技試験までの間に、期末実技試験では中間実技試験後に、学生がそれぞれ練習した楽曲3曲を自己申告し、その中から抽選で1曲演奏することになっている。試験の点数は、複数名の教員が歌・ピアノ演奏それぞれの出来栄え、演奏姿勢・顔の表情、弾き歌いとしての完成度の3つの評価ポイントから判定し、その平均値を取っている。

両年度とも、授業前半は主として「続 こどものうた200」(小林美実編, チャイルド本社)に掲載されている楽曲を課題にした。授業後半については、2006年度は、「こどものうた200」(同)の中から「あめふりくまのこ」「犬のおまわりさん」「とんぼのめがね」「しゃぼんだま」「おもいでアルバム」「アイアイ」「ぞうさん」「こたりのうた」「しょうじょう寺の狸ばやし」「森のくまさん」「一年生になったら」「うれしいひなまつり」、および声楽の授業で配布した弾き歌い曲などを課題として指示した。2007年度は、2006年度の演奏映像提出回数の上位7曲、「あめふりくまのこ」「犬のおまわりさん」「とんぼのめがね」「しゃぼんだま」「おもいでアルバム」「ぞうさん」「森のくまさん」と、声楽の授業で配布した弾き歌い曲などを課題として指示した。さらに、この7曲に関するピアノ弾き歌い模範演奏(2.(3)に後述)のWebサイトのURLを知らせ、同時にその模範演奏のDVDを2人に1枚ずつ配布し、いずれかの方法で閲覧するように伝えた。

(2) 演奏映像の撮影と映像提出の方法

演奏映像の撮影は、中間実技試験と期末実技試験との間に、練習室に設置した録画装置「KS20」(「研修君」)を用いて行われた(写真1)。

この装置は、富士フィルム(株)の子会社、フジノン(株)が開発した、製造業における生産現場の熟練技能を次世代に伝承するための動画コンテンツ作成システムであり(横山他, 2004)、撮影用CCDカメラと8.4インチのタッチパネル液晶モニター、画像処理用CPUなどで構成され

ている。通常のビデオデッキと同じ操作方法で録画することができるため、コンピュータ操作を知らない学生でも容易に自分の映像を記録・抽出できるというメリットがある。MPEG2形式で約20時間分の演奏を記録し、必要に応じて映像内に書き込みができ、パソコン経由でDVD-Rへのデータ保存も可能である。別売のプリンターを使うことによって、個々の映像を識別するためのバーコードを印刷することもできる。本実践では「研修君」本体にプリンターを接続し、バーコード印刷を行った。



写真1 練習室で録画をしている学生の様子

中間実技試験終了後、履修学生に「研修君」の操作説明を行い、映像を記録した後に書き出されるバーコードシールを教員に提出することで“映像提出”とみなすことを伝えた。

2006年度はこの提出回数を成績に加算することとし、撮影する曲は中間実技試験後に練習した任意の楽曲とした。2007年度は提出を義務とはせず、成績に反映させないこと、撮影する曲は中間実技試験後に練習した任意の楽曲でもよいが、ピアノ弾き歌い模範演奏7曲を反復視聴し、それら7曲の演奏の撮影を推奨することとした。2007年度の映像提出実践の特徴は、模範演奏の視聴を加えた点、学生の自主性を重視した点である。

学生は自身の演奏を撮影し、複数回撮影した

場合は、再生して内容確認を行い、最も出来栄が良いと判断した演奏映像のバーコードシールを提出した。

(3) ピアノ弾き歌い模範演奏映像の配信

2006年度の実践の後、学生に実施したアンケート（2006年9月）において、教員から提供して欲しいコンテンツを尋ねたところ、「弾き歌いの模範演奏を見たい」、「声の出し方（発声法）を説明して欲しい」、「指づかいについて実例を示して欲しい」、「弾き歌い、ピアノ演奏の姿勢や表情、視線について大切な点を示して欲しい」などの要望が多かった（深見他，2006）ことから、我々はまず、2006年度における練習映像提出回数上位7曲のピアノ弾き歌い模範演奏の制作に取りかかった。また、その7曲に関して学生の提出映像を分析して間違いやすい箇所や陥りやすい点などを抽出し、それらを書き込んだ楽譜を制作した（深見他，2006）。

模範演奏の撮影は、2006年12月27日～28日、深見の自宅スタジオ（東京・早稲田）において、ディレクション～深見・中平、演奏～山下薫子（東京藝術大学准教授）、撮影～牧野一憲（元（株）ビクターエンタテインメント、現在フリーランス）・遠山和夫（京都女子大学非常勤講師）により行われた。

全体の印象のみならず、手首の角度、指づかい、顔の表情などを確認できるように、3台のデジタルビデオカメラ（そのうちの一台はハイ

ビジョンカメラ）を用いて、正面（顔）、斜め後ろ横（手指）、横（全体）の3方向から撮影した。

その後、撮影した映像から必要な部分を切り出し、映像編集ソフトウェアのCanopus社製「Edius」により整形・加工を行った。「Edius」を用いることで、ハイビジョン形式で録画した映像の画質を可能な限り低下させないように編集を行うことができた。また、歌詞の字幕を音楽の進行にあわせて挿入した。

加工した映像は、MPEG2形式とSWF（Macromedia Flash）形式の2種類に変換した。MPEG2形式のものは動画の質が高いが容量が大きく、主としてDVDによる配布に用いるためのものである。一方のSWF形式は画質はMPEG2形式より劣るが、再生環境への依存度が小さく（Win, Mac, Linuxのすべてで閲覧ができる）、また容量も小さくすることができるため、主としてインターネットを通じた配信に用いるためのものである。

MPEG2形式のファイル群には、市販品あるいはパーソナルコンピュータに付属するDVDプレイヤーで閲覧できるようにインデックスを作成し、一連のコンテンツとしてDVDメディアに保存した。また、SWF形式の方にはHTML形式でコンテンツを作成し、サーバ上にアップロードすれば直ちにWebサイトとして閲覧が可能になるようにし、JASRACの音楽著作物利用許諾を得て、映像配信を開始した（写真2）。

教員・保育者養成のためのピアノ実践eラーニングコース

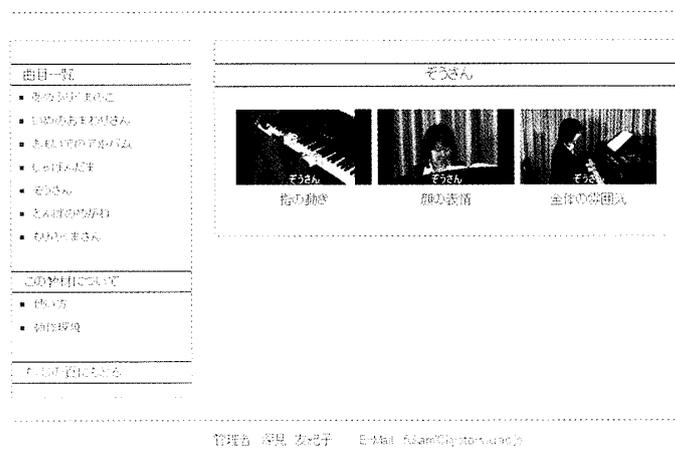


写真2 ピアノ弾き歌い模範演奏Webサイトトップページ

3. 映像提出の評価と分析

(1) 映像提出の回数と期末実技試験の点数との 連関

表1は2006年度と2007年度のピアノ弾き歌い映像提出の回数、その回数に該当する提出者の人数、期末実技試験の平均点と標準偏差である。

2006年度は、2～3回提出した学生が最も多く(25人、23人)、まったく録画をしていない学生から10回ほど録画した学生までかなり分散していたが、映像提出と期末試験の平均点に着目すると、特に5回録画を行った学生の平均点が高かった(平均77.0点)。

映像提出回数	年度	提出者数	平均点	標準偏差
0	2006	14	71.9	7.02
	2007	22	73.5	6.53
1	2006	13	74.0	5.52
	2007	29	73.6	8.01
2	2006	25	74.0	5.34
	2007	20	75.4	7.26
3	2006	23	71.4	16.06
	2007	30	76.4	6.63
4	2006	14	74.6	3.77
	2007	6	77.3	5.82
5	2006	8	77.0	4.38
	2007	1	-	-
6	2006	3	72.3	(6.81)
	2007	0	-	-
7	2006	1	-	-
	2007	0	-	-
8	2006	1	-	-
	2007	0	-	-
9	2006	0	-	-
	2007	0	-	-
10	2006	2	67.5	(2.12)
	2007	0	-	-

表1 2006・2007年度の映像提出と期末実技試験結果

映像提出と期末実技試験の平均点における相関係数は0.66で、明らかな正相関が存在し、また、ある一定量以上の映像を提出した学生は実技試験の点数も伸びていることから、映像提出はピアノ実技能力の向上に一定の効果があると示唆することができる(中平他, 2006)。

次に、標準偏差に着目すると、映像提出を3回行った学生において異常に値が高い(16.06)ことがわかる。試験に備えて準備をする曲を3曲としたために、その3曲を確実に仕上げた録画した学生と、練習している3曲をとりあえず提出し、期末実技試験の点数の低さを補おうとした学生が混在することに原因があると推測できる(深見他, 2006)。

一方、2007年度は、1回提出と3回提出にピークがある(29人、30人)。2006年度との決定的な違いは、5回以上の提出者はほぼいなかったこと、提出回数を成績に加算することにした2006年度と比較して、映像提出をまったく行わなかった者の割合が大きい(22人)ことである。このことは、学生に映像提出を強要しなかった分、必要数だけを提出しており、練習した成果を相応に提出しているという前提を補強しているといえよう。

映像未提出学生の実技試験平均点は昨年度より1.6点上昇し、標準偏差は0.49小さい。この結果を即座に分析することは難しいが、1つの仮説として、今年度の母集団は昨年度と比べ平均的な実技レベルが得点に換算して2点ほど高いと考えられる。

そこで、この仮説を元に表1を分析する。2007年度も映像提出回数が1、2回の学生については2006年度とほぼ同じ傾向がみられる。ただし、標準偏差は2007年度の方が値が大きくなっていることから、2007年度は学生の実力にはばつきが大きいことも伺える。映像提出3回目以上の学生については、2007年度の方が平均点が2.7～5.0点高く、標準偏差も小さい(6.63, 5.82)ことから、成績に加算しないという条件下でさえ自主的に映像提出を3回以上行った学生は高得点が得られたことがわかる。

グラフにしてみると、さらに結果は明瞭にな

る。図1は、映像提出回数、全体に対する提出者の割合、期末実技試験の平均点の関係を示したものである。棒グラフは映像提出回数—提出者の割合を、折れ線グラフは映像提出回数—期末実技試験の平均点の関係を表している。グレー色は2006年度、黒色は2007年度分の結果である。

2007年度の映像提出については、提出回数および内容を成績に加算することはせず、授業内においても「期末実技試験の予行演習のつもりで録画するように」と指示するに止めたため、映像提出は学生の自主性に任せる形となった。それにもかかわらず、履修学生の8割の学生が映像提出を行ったことから、特に弾き歌いが得意な学生のみが映像提出を行ったわけではなく、意欲のある学生や試験の予行演習を行いたい学生が映像提出を行ったとしてよいだろう。

このことは、必修科目の多い2年次生が講義

と講義のわずかな空き時間に練習室まで出向いて練習・録画をしていた観察事実からも容易に推測できる。逆に、ピアノ弾き歌い演奏を録画すること自体に抵抗のある学生や、特に演奏に自信のある学生、予行演習を行わなくても当日試験で高得点を取れると判断した学生は映像提出を行っていないと推察することもできよう。

以上のことから、映像提出回数と期末実技試験の得点に正の相関がみられるのは、演奏に自信のある学生がより収録に積極的であったためではなく、「成果物」である演奏映像を提出することそのものが期末実技試験の得点、すなわちピアノ弾き歌い実技能力の向上に大きく貢献したと判断できる。そして、その要因には「予行演習を行うことによって間違いやすい箇所を自覚できる」、「録画をすることが本番（期末実技試験）での緊張を和らげるのに一役買っている」ことがあげられるのではないかと考えられる。

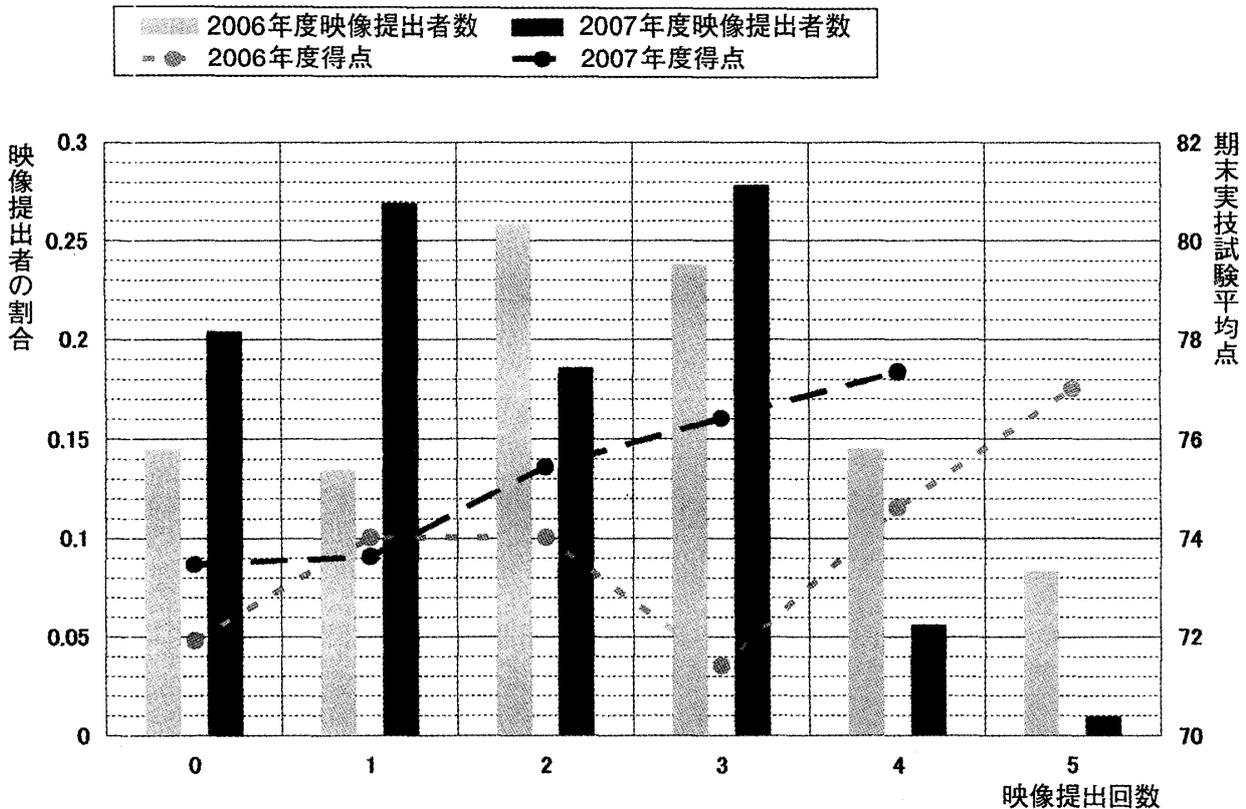


図1 映像提出と期末試験の平均点

曲名	学生数	平均点	標準偏差	(楽曲特性)
しゃぼんだま	7	73.6	4.47	比較的平易
とんぼのめがね				
あめふりくまのこ	5	81.6	2.70	情感表現を重視
おもいでアルバム				
もりのくまさん	2	79.0	1.41	-
犬のおまわりさん	3	81.7	4.46	-
ぞうさん	3	78.7	1.15	-
その他	30	75.1	7.90	-
収録-テスト一致		77.0	6.51	-
収録-テスト不一致		73.4	6.82	-

表2 2007年度のピアノ弾き歌い模範演奏提示楽曲と期末実技試験結果

(2) 模範演奏提示と期末実技試験の点数との関連

2007年度は“Webサイトで閲覧する”，“DVDで貸し出す”という2つの方式で，学生がピアノ弾き歌い模範演奏を繰り返し視聴し，どのように演奏すべきかをいつでも何度でも確認することができるようにした。

表2は，2007年度期末実技試験において，試験当日抽選で演奏した1曲が映像提出した曲と一致した者について，曲名ごとの平均点を示している。「その他」は，当日抽選で演奏した曲が，模範演奏を提示した7曲以外である場合の平均点を，「収録-テスト一致/不一致」は，模範演奏を提示した7曲について，映像提出曲と抽選で演奏した曲とが一致する場合としない場合，それぞれの平均点を参考値として表記している。

ここでは一致する学生数が多かった比較的平易な曲（ペダルも特に必要ではなく，難しいフレーズやリズムもない）である，「しゃぼんだま」「とんぼのめがね」（A群）と，情感表現を重視する曲（通常，ペダルを使用し，流れるようなイメージで演奏する）である，「あめふりくまのこ」「おもいでアルバム」（B群）の4曲に絞って，分析を行う。

A群およびB群の平均点を比較すると，7点以上の差がついている。このことは，情感表現を重視する曲の方が，模範演奏を提供することによって期末実技試験の得点が大きくアップす

る可能性があることを示唆している。

しかしながら，この表のみを根拠にするならば，実技能力の高い学生が「あめふりくまのこ」「おもいでアルバム」を選んだともとれるであろう。そこで，表2の結果をもう少し詳細に分析してみることにする。

表3に楽曲特性ごとの映像提出の状況と期末実技試験の平均点を示す。

比較的平易な曲の場合は，映像を提出した学生とまったく提出しなかった学生との間の期末実技試験の得点差は3.9点ほどに止まっているが，情感表現を重視する曲については，映像を提出した学生とまったく提出しなかった学生の間には7.2点の差がついた。同じように練習を促しても比較的平易な曲と情感表現を重視する曲の間には，学生の技能習得のプロセスにかなりの違いがあるのではないかと考えられる。

我々はこの結果を主として「模範演奏を提示したことによる，情感表現の伝わり」であるととらえている。つまり，模範演奏映像を見せることにより，演奏時のイメージトレーニングが円滑に行われた結果，得点差に結びついたのではないか，模範演奏の視聴は，演奏の正確さにそれほど大きな影響は出ないが，暗黙的に演奏イメージを身に付けることができるのではないかということである。

映像提出	期末実技試験平均点	
	楽曲特性 比較的平易	楽曲特性 情感表現を 重視
全く提出せず	68.7	73.7
試験での演奏 曲以外を提出	70.7	76.3
試験での演奏 曲を提出	72.6	80.9

表3 演奏映像提出状況、楽曲特性と期末実技試験平均点

(3) 提出曲と課題曲の一致／不一致と期末実技試験の点数との連関

最後に、演奏映像を提出した楽曲と実際の試験で課題に出された楽曲が一致する場合としない場合の、期末実技試験の得点の傾向をみる。表2の「収録—テスト一致」は、演奏映像を提出した、すなわちよく練習したと推測される曲が試験曲として課された場合の得点、「収録—テスト不一致」は、演奏映像を提出した曲が試験曲として課されなかった場合の得点である。

両者を比べると、「収録—テスト一致」と「収録—テスト不一致」には得点差が3.6点あり、また、標準偏差の値はほぼ同一であることから、練習成果を映像提出させた後で期末実技試験を受けることは、実技能力の向上の観点から有益であると考えられる。しかし、模範演奏を提示した7曲以外の演奏映像を提出している場合の「その他」と、「収録—テスト一致」に大きな差異が認められなかったことから、模範演奏提示の効果を断定するのは難しい。

4. まとめと今後の展開

(1) 実践結果の総括

我々は、2007年度の実践において、以下の2つの観察点を設定した。

観察点1. 演奏映像提出によってピアノ実技能力に向上がみられるか

観察点2. 模範演奏を視聴することで学生の演奏に変化がみられるか

2006年度の実践において、すでに映像提出と期末実技試験の平均点には正の相関が存在し、

ある一定量以上の映像を提出した学生は実技試験の点数も伸びていることから、映像提出はピアノ実技能力の向上に一定の効果があると示唆できたが、より学生の自主性を反映させるように設定した2007年度には、さらにはっきりと映像提出は期末実技試験の平均点の押し上げに一定の効果が生じることがわかった。

2007年度の実践においては、グループレッスンでは学生それぞれに対して通奏して示す時間的余裕がない模範演奏を“Webサイトで閲覧する”、“DVDで貸し出す”という2つの方式で提示した。この提示の効果に関しては、今回の実践では特に詳しい分析を行ったわけではないが、期末実技試験において、情感表現を重視する曲の方が比較的平易な曲よりも高得点であったという結果を導き出し、模範演奏を提示することによって、演奏時のイメージトレーニングが円滑に行われるのではないかと可能性を提起することができた。しかしながら、これはまだ仮説の域を出ておらず、その効果を特定するためにはさらなる実践と分析が必要である。

(2) 演奏映像提出に関する学生の意識と実際の効果

2006年度に実施したアンケートにおいて、「演奏映像提出をすることによって、ピアノ演奏技術は向上したと思う」という質問に対する学生の回答は、思う(12人)、あまり思わない(66人)、思わない(3人)、わからない(9人)であった。「録画中という緊張した状態で演奏することが役立った」「しっかりと仕上げようと思うようになった」という声もあったが、映像提出が実技能力の向上に結びついたかということに対しては否定的な学生が大多数を占めた(深見他, 2006)。

しかしながら、実際には2年連続して演奏映像提出の効果が明らかになっている。このことは、学生が実感する以上に演奏映像提出が練習成果の反映であり、実技能力や自己研鑽へのモチベーションの向上に一定の効果があることを示している。加えて、対面式授業(レッスン)の時間数が限られている保育者(教員)

養成機関において、こうした演奏映像提出を併用させることは、従来の指導を補う一方法として有効であると結論づけることができよう。

(3) 今後の展開

本稿では、学生による演奏提出、ピアノ弾き歌い模範演奏の提示による効果を分析したが、我々は、さらに広い見地から研究を進めている。まず、演奏を提出させるだけでなく、それらに対するフィードバックを試みており、2006年度「児童音楽Ⅰ」の補習学生に対して、3回の映像提出とその映像に対する非対面指導（文字と注意書きを書き込んだ楽譜による）を行った（2006年10月～2007年5月）。現在、この実践の効果については分析・検証を終えている。

また、2006年度に実施したアンケートにおいて、提出された演奏映像に対するアドバイスを求めている者が多かったことから、2007年度には、「児童音楽Ⅱ」履修学生のピアノ演奏映像に対して遠隔にいるアドバイザー（赤羽美希）が上書き保存映像（アドバイザーによるコメントと模範演奏）を作成して学生に返送し、学生はそれを閲覧してさらに練習を積み、再録画するという試みをした（2007年6～7月）。この“遠隔レッスン”の実践に関しては、現在、アドバイスの前後の学生のピアノ演奏を比較、検討中であり、改善された部分、変わらない部分などを詳細に分析することによって、非対面・非同期によるアドバイス映像の効果を明らかにする予定である。

さらに、2007年度「児童音楽Ⅰ」の補習学生に対しては、ピアノ弾き歌い課題を手渡し、2週間の練習期間を設けた後、練習内容の詳細、課題に対する感想と一緒に演奏映像を提出させた（2007年9～10月）。この実践により、ピアノ実技を苦手とする学生が共通に陥っている事柄を明らかにするとともに、自学自習でピアノ実技能力の向上がどこまで可能であるかを探りたいと考えている。

2007年度末には、学生からの要望が多かった声楽のコンテンツを制作し、配信する予定であり、現在、志民一成（静岡大学教育学部准教授）、

日高祐子（淑徳大学非常勤講師）のディレクションの下、準備を進めている。先に制作したピアノ弾き歌いコンテンツと同様、模範演奏映像の配信を行い、その効果の測定を継続して行っていく予定である。

我々は、児童学科という学生数の多いフィールドで以上のような実践を重ねることによって、通常マンツーマンで伝承されてきたピアノ実技指導に対するICT（Information and Communication Technology）の有効性を明らかにし、ピアノ実技ブレンデッド・ラーニングを確立したいと考えている。それが実現した時、限られた対面式授業（レッスン）の中での指導を余儀なくさせられてきた保育者養成機関におけるピアノ実技指導は、パラダイム転換の時を迎えることになるだろう。

謝辞 本研究は、平成18・19年度科学研究費補助金基盤研究（C）「教員・保育者養成のためのピアノ実技e-ラーニングコースの設計と開発」（課題番号18500742）、およびフジノン株式会社からの委託研究費の補助を受けて行われたものである。

引用文献

- 今泉明美 “ピアノ初心者学生の為のピアノ授業の試み—集団講義とキーボード・ピアノを用いて(2) 練習カルテ導入” 日本保育学会全国大会発表論文抄録 vol. 57 pp.560-561 (2004).
- 中島卓郎 “実践的指導力を高めるピアノ教育の試み—教員養成教育の場合—” 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要「教育実践研究」No. 3 pp. 31-40 (2002).
- 中平勝子, 赤羽美希, 小林田鶴子, 山口尚己, 深見友紀子 “保育者養成教育における映像提出を併用したピアノ実技指導” 第22回日本教育工学会全国大会講演論文集 pp. 421-422 (2006).
- 深見友紀子, 中平勝子, 赤羽美希 “ピアノeラーニングに向けて—学生が演奏映像を自主的に提出する試み—” 京都女子大学発達教育学部研究紀要 vol. 3 pp. 33-41 (2007).
- 横山淳一, 松田信一, 中平勝子, 福村好美 “マルチメディアの取り扱いが容易な授業支援ツールの開発” 情報処理学会研究報告 vol. 2004 No. 117 pp. 61-66 (2004).

参考文献

中平勝子, 深見友紀子, 赤羽美希 “保育系教育機関における模範映像提示・練習映像提出を併用した実技指導の実践” 第23回日本教育工学会全国大会講演論文集 pp. 273-274 (2007).
Katsuko T. Nakahira, Yukiko Fukami, Miki

Akahane “Combining Music Practicing with the Submission of Self-made Videos for Pre-School Teacher Education” 5th International Conference on Computers in Education Supporting learning flow through integrative technologies pp. 573-576 (2007).

Abstract

This paper reports on the teaching of piano playing and singing, conducted over two years (FY2006 to FY2007). In order to compensate for the shortage in time available for face-to-face tuition, the Department of Pedology, Faculty of Human Development and Education, Kyoto Women's University, required one hundred or so students to practice piano playing / singing, to record the performance they had achieved through practice, and to submit the recorded video. After reviewing the trial conducted in FY2006, we changed the method of evaluating the recorded videos in the following two ways for FY2007:

- (1) Submission of the video no longer adds to the student's grade points, a change intended to signal that the submission is only a part of voluntary training.
- (2) Students were given opportunities to watch a model performance.

As a result of (1), FY2007 saw a clearer correlation between the number of video submissions and the scores of performance tests than FY2006. Namely, the results suggest that a greater number of submissions by each student tended to lead to an increase in the average score in the end-of-term performance tests. This indicates that the submission of videos recording students' accomplishment motivates students to practice hard to improve their skill in performing, and effectively compensates for a shortage in the conventional face-to-face training of piano playing / singing.

The opportunities mentioned in point (2) resulted in a favorable change in student's performance, particularly in playing those pieces that demand a rich expression of emotion. We find it possible to postulate that watching a model performance enables students to understand the required manner of playing on their own without being given explicit teaching. However, this hypothesis will require further analysis and verification.